

法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について

和田妙咲

一 はじめに

(一) 問題の所在

法華経は一切皆成を説くなかで女人成仏を大きく取り上げた経典である。これまで一般には法華経の女人成仏研究としては提婆達多品(以下、提婆品)の龍女成仏(1)が特に大きく取り上げられ、変成男子についての議論が盛んに行われてきた印象がある。日蓮聖人も法華経のみが女人成仏を説くと考え、古来蔑視された女性に対して積極的に教化された。遺文中に龍女成仏を引用することが多いのをうけて、聖人の女人成仏観に関する先行研究についても法華経の女人成仏研究と同様に提婆品を根拠とする見解が多く見られる。しかし聖人が女人成仏の理論的根拠を龍女成仏のみに求めたとみなすことには疑問が残る。なぜならば聖人は女人成仏を論ずるにあたり変成男子について言及していないからである。

そこで本論文では、変成男子を説く法華経提婆品の女人成仏説について改めて検討し、続いて変成男子を扱わない日蓮聖人の女人成仏思想について考察したい。

(二) 先行研究概観

はじめに女人成仏研究の歴史をまとめたい。日本における女人成仏思想に関する研究の契機として後代に大きな影響を与えたのは一九七五年（昭和五〇年）に出版された笠原一男『女人往生思想の系譜』である。⁽²⁾ その見解には再考の余地が残るが、以降、平雅行「中世仏教と女性」⁽³⁾等、歴史学分野で女人成仏についての議論を展開させた功は大きい。

一方、仏教学の分野では渡邊樸雄、平川彰⁽⁴⁾、平川彰⁽⁵⁾両氏の著作の中に大乘經典における女人成仏および変成男子についての言及がみられるが、どちらも法華經の女人成仏については提婆品を提示するのみである。

その後さらなる研究の契機となったのは一九九〇年代に盛んであったフェミニズムからの仏教批判である。哲学者の大越愛子氏は「仏教の性否定的、性差別的文化パラダイムの特徴は、性差否定型、女性排除型である。」と仏教を痛烈に批判し、さらに変成男子は女性性を否定し男性に変身することで成仏できるという仏教独特の教えであるとして、その根拠の一つに法華經提婆品の龍女成仏を挙げている。⁽⁶⁾

ところで提婆品解釈をもって法華經の女人成仏を論ずるといふ研究の流れに一石を投じたのは荻谷定彦、望月海淑の両氏である。荻谷氏は龍女成仏が法華經を代表するとはいえず、「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷」「善男子・善女人」と呼びかけていることから、法華經はあくまで男女平等であり、在世・滅後関係なく一切衆生はばさつであるという一つの信仰に立脚していると示し、望月氏は法華經における女人成仏は勸持品の説示で言い尽くされたとする見解を残している。⁽⁸⁾

そのほか桑名貫正⁽⁹⁾、間宮啓壬⁽¹⁰⁾、穂坂悠子氏等、法華經の女人成仏や日蓮聖人の女人成仏解釈については今日まで盛んに議論され数多くの見解が発表されている。荻谷・望月両氏の論文以降、龍女成仏のみを用いて女人成仏

について論じるのは不十分であるという意見もみられるが、石川教張「日蓮の女人成仏法門について―法華経提婆品の龍女成仏を中心に―」等、近年の研究でも龍女成仏を女人成仏の論理的根拠とするものも多い。また変成男子の解釈については、田上太秀、龍村龍平、植木雅俊、佐野匡史等の各氏のものがある。¹³⁾

(三) 本論文の構成

本論文では、まず鳩摩羅什訳妙法蓮華経提婆品の龍女成仏の部分について検討する。その際、法華経の注釈書とくに天台・妙楽・伝教の三師の文献によって天台教学における龍女成仏(変成男子)の解釈をみてみる。それは日蓮聖人が天台教学をふまえた上で独自の教学を樹立されているからである。なお提婆品は後代に付加され、その成立時期については諸説あるが、天台大師の時代には法華経中に同品が存在し、日蓮聖人も二八品の法華経を受持していたため本論文では論点としない。

次に日蓮聖人の女人成仏解釈について、聖人遺文の中で女人成仏について言及する箇所を大まかに分類し分析・解説してみる。聖人が女人成仏について説明するとき、実は提婆品の注釈は用いず、¹⁴⁾授記品・随喜功德品の注釈を引用している点に今回特に注目したい。

本論文では読みやすさの観点から『妙法蓮華経』および各「品」の表記についてカギ括弧を省略し、法華経の本文は『妙』を付してゴシック体、日蓮聖人遺文は太字で表記する。法華経および天台・妙楽の文は『大正蔵』(ただし句読点は私に付す)、伝教の文は『伝全』を底本とする。天台・妙楽については本文中に書き下し文を記載し、註に原文を載せる。漢字は東洋漢字を基本とし、特に重要であると思われる箇所には私に傍線を付す。本論文で取り上げる日蓮聖人遺文は真蹟完存・曾存・断片現存・断簡現存・直弟写本現存に限るものとする。

二 法華經提婆達多品の女人成仏説

本節では、天台三師の注釈を参考にしながら提婆品の龍女成仏をめぐる重要ポイントを物語の順を追って取り上げ、その要点を確認したい。

(一) 「難成趣」である龍女―法華經の力用

見宝塔品にて釈尊と多宝如来が虚空の宝塔の中に并座するなか多宝如来の弟子である智積菩薩が文殊菩薩と法論を交わしている。本項では智積の「文殊の通經によって速やかにさとりを得た者はいるか」との問いに対して、文殊が娑竭羅龍王の八歳の娘を挙げ彼女がさとりを得ることについて述べる場面を解説する。法華經本文は次のとおりである。

① 『妙』娑竭羅龍王ノ女、年始^テ八歳^{アリ}。智慧利根^{シテ}、善^ク知^リ衆生ノ諸根ノ行業^ヲ、得^ニ陀羅尼^ヲ、諸仏ノ所説、甚深秘藏、悉^ク能^ク受持^シ、深^ク入^リ禪定^ニ、了^ニ達^シ諸法^ヲ、於^テ刹那頃^ニ、發^シ菩提心^ヲ、得^ニ不退轉^ヲ。弁才無碍^シテ、慈^ニ念^ススルコト衆生^ヲ、猶^ホ如^シ赤子^ニ。功德具足^{シテ}、心^ニ念^ヒ口^ニ演^ルコト、微妙広大^{ナリ}。慈悲仁讓、志意和雅^{シテ}、能^ク至^リ菩提^ニ。

主人公は娑竭羅龍王の娘である。彼女は非常に賢く深く瞑想に入って仏の教えを領解し終え、菩提心を起こし不退転の大乗の菩薩の位を得ている。さまざまな功德を具えていて、心の内を口に出して述べるセンスが素晴らしく説法も自由自在に行う。慈悲深く思いやりと謙讓なところをもち、人々を慈しみ心にかけるありさまは赤ん坊に接するかのようだ。さらに優しくおだやかで上品であり、さとりに至る能力をもっていると褒めている。

ところで、傍線部は「不退転を得たり」「能く菩提に至れり」と過去形で読んだ。既に岩波『法華經(中)』で

坂本幸男・岩本裕両氏も同様に読み¹⁷⁾、さらに藤井教公『仏典講座七 法華経下』でも同部分を「さとり¹⁸⁾に到達している」と和訳している。

右の文について『秀句』では次のように解説する。

当^レ知^ル、此文^ハ明^ハ明^ニ難^ク成^ルノ趣^ニ、顯^スコトヲ^レ經^ノ力^ヲ用^フ。六趣之中^ニハ、是畜生趣^{ナリ}。明^ニ不善^ノ報^ヲ。男女之中^ニハ、是則^チ女身^{ナリ}。明^ニ不善^ノ機^ヲ。長幼之中^ニハ、是則^チ少女^{ナリ}。明^ニ不久^ノ修^ヲ。雖然^{リト}、妙法華^ノ甚深微妙^ノ力^ヲ、具^ニ得^ニ二蔽^ノ用^ヲ。明^ニ知^ル、法華^ノ力^ヲ用^フハ、諸經^ノ中^ノ宝^ヲ、世^ニ所^{ナリ}希^{ナリ}有^{ナル}。

この箇所はそれまで成仏を許されなかつた者に対して法華経の力用をもつて成仏が許されたことを顯すとある。龍女は「難成趣」すなわち①六道の中では畜生²⁰⁾であり、②男女の中では男性よりも機根の低い女性であり、③長幼の中では修行の期間が短い子ども²¹⁾であるが、そのような者であつても経力により二種莊嚴すなわち福德莊嚴と智慧莊嚴を得て成道するという。この文から伝教大師が法華経を十界皆成を説くものとみなしていること、ここでは特に法華経の経力を強調していることが分かる。

(二) 智積と舍利弗の疑難―女性が成仏することへの異議―

次の一連の経文②～⑤は龍女が成仏することへの智積と舍利弗の疑念とそれに対する龍女の返答であるが、理解を助けるために該当する法華経本文を見る前に『文句』による解説の一部を紹介したい。その解説はここで扱う内容のガイドラインといふべきものであり、後に掲げる『秀句』の説明に対応する。

四、智積、別教に執じて疑を為す。五、龍女、円を明し疑を釈す。六、身子、三藏の権を挟んで難ず。七、龍女、一実を以て疑を除く²²⁾。

これによれば智積は別教に、舍利弗は小乘(藏教)に執着しているために龍女の成仏に疑問を呈し、それに対

して龍女は実教（法華経）をもってその疑いを払うとある。この一連の流れを頭に入れた上で以下の場面をみていきたい。まずは智積の言葉である。

②『妙』智積菩薩ノ言ク、我見^ニ上^レハ^ニ積迦如来^マ、於^テ無量劫^ニ、難行苦行^シ、積^ミ功^ヲ累^レテ^ニ徳^ヲ、求^ニ菩薩ノ道^ヲ、未^ニ曾^テ止息^シ下^ルハ、（中略）不信^シ此女人^ヲ於^テ須臾ノ頃^ニ、便^チ成^ス中^ルコトヲ正覚^ス上^ル。

ここでは智積が釈尊であつても長い過去世に修行してようやく成道したにも関わらずなせ龍女が速やかに成仏できるのかと疑問を呈している。

ここで先ほど示した『文句』の釈（「智積執別教為疑」）に対応する『秀句』を確認すると、

当^ニ知^ル、智積菩薩ハ拳^ニテ歴劫修行^マ、難^シ即身成仏^マ、信^ニ三阿僧祇ノ仏^ヲ、不^レ成^ルトヲ信^ニ須臾ノ成^ルトヲ

と解説される。智積は別教の立場から菩薩の歴劫修行を根拠に三阿僧祇の仏だけを信じているために龍女の速やかな成仏を認めなかつたとある。ここで注目すべきは、智積は龍女の速やかな成仏という点を問題視しているのであり、龍女の性別には触れず龍女（女性）の成仏そのものに異議を呈しているわけではない点である。

次の場面では、智積の問いに続いて舍利弗も①成仏には長い修行が不可欠であること、②女性が「垢穢」であること、③女性には「五障」があることの三点を挙げて、龍女の成仏に疑問を呈する。すなわち舍利弗は速やかな成仏という点に加えて、龍女の性別が女性ということに因縁をつけるのである。

③『妙』時^ニ舍利弗、語^テ龍女^ニ言^ク、汝^ハ謂^フ三^レ不^レ久^{カラ}、得^ニ無上道^ヲ。是^レ事難^シ信^シ。所以^ハ者何^ン。女身垢穢^ニシテ、非^ズ是^レ法器^ニ。云^ハ何^ニシテ能^ク得^シ、無上菩提^ヲ。（中略）又女人ノ身ニハ、猶^ラ有^リ五障^ニ。一^ニ者不^レ得^テ作^ル梵天^ニ王^ト、二^ニ三者帝釈、三^ニ三者魔王、四^ニ三者転輪聖王、五^ニ三者仏身^{アリ}。云^ハ何^ニシテ女身、速^ニ得^テ成仏^ストヤ。

ここでは女性の身体は穢れていて仏の教えを受けとる能力に足りず、しかも女性には五障があると、舍利弗が

龍女の成仏に疑問を投げかける。「垢穢」・「五障」という女性蔑視の表現が使用されており、そこから派生的に法華経が五障を説く女性蔑視の教であると主張する人々がいることは大きな問題である。その理由を先ほどの『文句』（「身子挾三藏權難」）に対応する『秀句』によって示してみよう。

当^レ知^ル、舍利弗、信^下シテ小乗^ニ三藏教、三僧祇劫^ニ修^シ六度ノ行^ヲ、百劫^ニ修^{スル}コトヲ相好^ノ業^上ヲ、不^レ信^下セ法華^ノ直^ニ至^リ道^ニ
場^一、於^テ須臾^ノ頃^ニ、便^チ成^中スルヲ正覚^上ヲ。次^ニ経^ニ云^ク、又女人^ノ身^ニ、猶^ホ有^リ五障^一。(中略)当^レ知^ル、舍利弗、拳^ニテ
小乗^ノ之義^ヲ、難^ニスルコトヲ龍女^ノカ便成^一。(29)

これによれば、経文にみられる「五障」や「女身垢穢」という女性への差別的表現は、舍利弗が藏教の立場から小乗の教えをもって三祇百劫の菩薩の修行を根拠に法華経による速やかなる成仏を難じ、さらに五障思想を根拠に女性の成仏を否定する場面で用いられるのであって、法華経の真意を説く仏陀の言葉ではない。したがって法華経③の記述をもって法華経が五障を説く女性差別の經典と見なすのは適切ではないといえよう。

ちなみにサンスクリット原本を確認すると、羅什訳の「垢穢」に相当する語はみられない⁽³¹⁾。五障については項目は全同ではないものの類似の記述がみられる。仏典における女性の成仏に関する記述としては古くは阿含經典の注釈書に比丘尼が阿羅漢になったことが記されており、仏教では当初より女性のさとりが不可能ではないと考えられていたことを物語っている⁽³²⁾。

次に挙げる経文④は②③への返答であり、変成男子をテーマとしたものである。この変成男子の箇所はフェミニズムの視点から特に女性差別であるとみなされる部分であるので、次にその解釈について本文をたどり成仏の時期と変成男子の意味について詳しく検討したい。

(三)「変成男子」

1 経文

智積と舍利弗の疑難に対し、龍女が仏に宝珠を捧げ変成男子して南方世界におもむき衆生を教化する様子が描かれる場面である。

④『妙』尔時^ニ龍女、有^リ一^ノ宝珠^一。価直^ニ三千大千世界^{ナリ}。持^テ上^レレ^ル仏^ニ。仏即受^ク之^ヲ。龍女謂^ク智積菩薩、尊者舍利弗^ニ言^ク、我献^ス尔^ニ宝珠^一。世尊^ノ納受、是^レ事疾^ク不^ヤ。答^テ言^ク、甚^ク疾^シ。女^ノ言^ク、以^テ汝^ノ神力^ヲ、觀^ニ我^ノ成^ル仏^ヲ、復速^ク於此^ニ。當時^ノ衆会、皆見^ル龍女^ノ忽然之間、變^シ成^リ男子^ト、具^シ菩薩^ノ行^ヲ、即往^キ南方、

無垢世界^ニ、坐^シ宝蓮華^ニ、成^シ等正覺^一、三十二相、八十種好^ヲ、普^ク為^ス十方^ノ一切衆生^ノ、演^ス妙法^ヲ。

ここでは龍女がこの上なく価値のある宝珠を仏に献上すると、仏は即座にそれを受け取ったという。さらに龍女は瞬く間に男性の身体となり、南方無垢世界に行つて等正覺を開き一切の衆生の為に法華經を弘通し、さらに智積や舍利弗はこの一連のありさまを目撃していたことが記されている。

2 成仏の時期の問題

法華經の龍女成仏については龍女は変成男子しなければ成仏できないとみなされ、それが女性差別であるという批判がある。この問題を考えるには龍女が成仏したのはどの時点であるかということがポイントになる。経文④の傍線部「変成男子（中略）成等正覺」の文から考えると、確かに変成男子してから南方世界に行きそこでさとりを得たと理解することができ、ここで経文④に対する『文句』の解説を確認することで、龍女の成仏が変成男子の前後どちらかという問いの答えを示したい。

第七、龍女現成明証にまた二あり。一は、珠を献ずるは円解を得るを表す。円珠とはその円因を修得するを

表す。仏に奉るは是れ因を將て果を剋するなり。仏の受ること疾きは果を獲ること速かなる也。(中略)二、正しく因因果満を示す。⁽³⁴⁾

ここでは龍女が釈尊に宝珠を捧げた行為は法華円教の修行を完了しさとりを得たことを示し、さらにそれを釈尊が速やかに受け取ったのは龍女の成仏が速やかであったことを指すとあり、『文句』では宝珠の授受をもって成仏したと解釈しているように思われる。仏が授記を与えてはじめて成仏が約束されるように、成仏の可否は仏のみが判断できる。したがって龍女から差し出された宝珠を受け取るという仏の行為が龍女の成仏を認めたと解釈することができる。⁽³⁵⁾

以上のように、一般には龍女は変成男子してから成仏したように認識されているのに対して、『文句』の解釈に立ち、釈尊が変成男子の前に宝珠の授受によって龍女が成仏することを認めたとすれば、変成男子しなければ女性は成仏できないわけではないと読めるのである。

3 変成男子のもつ意味―『文句』と『秀句』の解説

変成男子がどのような意味をもつかという議論については諸説ある。例えば、田上太秀氏は変成男子とは出家を指し女性の姿から男僧へという外見上の変化を意味するとの見解を示し、⁽³⁶⁾龍村龍平氏は変成男子における男身とは単なる男性ではなく成道後の釈尊の姿を指すため、変成男子のもつ性転換を単純な身体の変化ではなく女性の内面的変化とする解釈をしている。⁽³⁷⁾さらに、植木雅俊氏は変成男子(転女成男)とはヒンドゥー教社会に配慮した妥協的表現であり、五障三従といった小乗的女性観へのアンチテーゼであるとまとめており、⁽³⁸⁾佐野匡史氏は提婆達多と龍女の関係を切り離さずに考えるべきであるとした上で、変成男子とは三十二相八十種好という外見上の条件を満たすためのものとしている。⁽³⁹⁾ここで法華経本文の続きとそれに相当する『文句』と『秀句』の解説

をみてみよう。

⑤『妙』尔時娑婆世界菩薩声聞、天龍八部、人_ト与_レ非人_一、皆遙_ニ見_レテ彼_ノ、龍女_ノ成_レ仏_{シテ}、普_ク為_レ三時_ノ会_ノ人_ト説_ク法_ト、心大_ニ歡喜_{シテ}、悉_ク遙_ニ敬_レ礼_ス。無量_ノ衆生、聞_レテ法_ヲ解_レ悟_シ、得_ニタリ不退_轉。無量_ノ衆生、得_レタリ受_ルコトヲ道_ヲ記_ス。無垢世界、六反_ニ震動_ス。娑婆世界_ノ三千_ノ衆生、住_シ不退_ノ地_ニ、三千_ノ衆生、發_ニシテ菩提_心ヲ、而得_ニタリ授_記。智積菩薩及_レ舍利弗、一切_ノ衆会、默然_トシテ信_受ス。

娑婆世界の者は龍女が成仏し大衆に法を説く姿を見て大いに歡喜して龍女に敬礼した。南方無垢世界の無量の衆生は龍女の説法を聴くことよつて不退轉となり記別を授けられた。娑婆世界の衆生もその様子を見て、發菩提心し成仏が確約（授記）されたとある。「無量の衆生」及び「三千の衆生」の中には当然女性も含まれるであろう。

さて『文句』では右の經文を次のように解釈している。

第八、尔時娑婆世界の下、時の衆の見聞を明す。（中略）南方は縁、熟すれば八相を以て成道すべし。此土の縁、薄ければただ龍女を以て教化す。此れは是れ権巧の力にして一身一切身を得る⁽¹²⁾。

「権巧の力」とは方便の力という意であろうから、龍女は、娑婆世界にいる龍女成仏を疑う者（智積・舍利弗等）にも理解できるように、その者たちの機根に合わせて變成男子して釈尊と同じ男性の姿になって教化したと理解できる。また身体を自由に操る様を見せることにより龍女がさとりを得て様々な力を有してことを強調しているように受け取れる。

次に伝教大師が『秀句』にて變成男子について述べた箇所を確認したい。

有_ル人_ノ云_ク、變成男子_トハ者_、未_レ免_レ取捨_ト。今謂_ク、法性_ノ取捨、法性_ノ縁起_{ハ、}常差別_{ナル}故_{ナリ}。法性_ノ同体、法

性ノ平等ハ、常平等ナルカ故ナリ。常平等ノ故ニ、不レ出テ法界ヲ。常差別ノ故ニ、不レ礙ヘ取捨ヲ。

この部分を先行研究⁽⁴⁾を参考にすると次のように説明できるだろうか。「取捨」とは区別の意。ここでは男女の区別さらには女性差別観に基づき、男性のみが成仏できる、また女性は變成男子しなければ成仏できないと考えることであろう。法性を同体とみなせば全てに区別はなく平等である。それは仏からみる世界ともいえるかもしれない。本質では一切衆生はみな区別なく平等なのでもちろん男女も平等である。しかし法性が顕現（縁起）すると、そこには形や姿といった個々の差が顕れ、まるではじめから全く異なっているように思われる。したがって区別観をもって物事を見る人は（区別観でしか物事を捉えられない人は）男女は異なると思っているため男性しか成仏しないという考え方を取り除くことができないのである。

三 日蓮聖人の女人成仏解釈

本節では日蓮聖人の女人成仏解釈について検討する⁽⁴⁵⁾。聖人遺文における女人成仏への言及箇所はその内容から四つに分類できると思われるので、以下の項に分けて考察を加えてみたい。ただし厳密に言えば聖人の女人成仏を捉える観点は明確に分類できるものではなく、また一つの遺文の中でいくつかの視点が見うけられるものがあることを断っておく。なお遺文の表記としては『定遺』の該当箇所を引用し、必要に応じて説明を付した。

(一) 一切皆成と女人成仏

1 『文句』『釈授記品』の引用箇所

日蓮聖人が女人成仏を説く際には『文句』巻七の上「釈授記品」の文を引用して一切皆成を説明する箇所が多

法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について（和田妙咲）

くみられる。これは聖人の女人成仏觀の特徴であると考えられるので、ここではそれをまとめて確認したい。ま
ず遺文を挙げるのに先立ち、遺文中に引用される『文句』『釈授記品』の文をみたい。

他經には但だ菩薩に記して二乘に記せず。但だ善に記して惡に記せず。但だ男に記して女に記せず。但だ人
天に記して畜に記せず。今經は皆記す。⁽⁴⁶⁾

「記す」とは記別の意。他經すなわち尔前經では記別を与えられなかつた二乘・悪人・女性・畜生を含む「皆」
に法華經は授記するというのである。

女人成仏を示して一切皆成に言及する聖人遺文の七例のうち五例が先にみた『文句』『釈授記品』の説明を女
人成仏の典拠とするものなので、それらを列挙してみる。

① 『法華題目抄』

女人は在世正像末総じて一切の諸仏の一切經の中に法華經をはなれて仏になるべからざる事を、靈山の聽衆
として道場開悟し給へる天台智者大師定て云々他經ハ但記レシテ男不レ記セシテ女ニ今經ハ皆記ス等云云。(中略) 天台智
者大師となりのて女人は法華經をはなれて仏になるべからずと定メさせ給へぬ。(四〇三頁)

② 『善無畏抄』

其上女人は五障三徒申シテ、世間出世に嫌ハレ一代の聖教に被レ捨テ畢ンヌ。唯法華經計リ仁古曾龍女加成レリ仏ニ諸
尼乃記別はさづけられて候ぬれば、一切乃女人は此經於捨テさせ給ては何經をか持ッせ給フべき。天台大師ハ
者(中略) 文句と申ス文乃第七卷には他經ニハ但記レシテ男不レ記セシテ女ニ等云云。(中略) 縱令千万經經仁女人可レ成ルと
雖モ為レト詐サレ法華經に嫌ハレなば何乃憑^{たのみ}可^加有^ル乎。(中略) 一仏二仏三仏乃至十仏百仏千万億仏ノ四百万億那由
他乃世界に充滿せりし仏の御舌をもんで定メをき給える女人成仏乃義也。(四一二、四一三頁)

③ 『千日尼御前御返事』

叡山ノ根本伝教大師の此事ヲ積シ給フには、能化所化俱ニ無シ歴劫ニ妙法経力即身成仏ス等。漢土の天台智者大師法華經の正義をよみはじめ給ヒしには、他経ハ但記レシテ男ニ不レ記レセ女ニ乃至今経ハ皆記ス等云云。此は一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成仏第一なりとことわらせ給フにや。されば日本一切の女人は法華經より外の一切経には女人成仏せずと嫌フとも、法華經にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。(一五四一頁)

④ 『日眼女釈迦仏供養事』

抑キ女人は一代五千七千余卷の経々に、仏にならずとさらはれまします。但法華經ばかりに、女人仏になると説かれて候。天台智者大師積ニ云ク不レ記レセ女ニ等云云。釈の心は一切経には女人仏にならずと云云。次下ニ云ク今経ハ皆記スと云云。今の法華經にこそ龍女仏になれりと云云。(一六二四頁)

⑤ 『法衣書』

天台大師云ク他経ハ但記レシテ男ニ不レ記レセ女ニ等云云。法華經にあらざれば女人成仏は許サレざるか。(一八五五頁)

以上に挙げた五例はすべて『文句』『釈授記品』の文を一切皆成の典拠とし、さらにそこから女人成仏を説くものである。聖人が女人成仏論において「釈授記品」の文をいかに重要なよりどころとしたかを窺い知ることができる。

2 その他

次に一切皆成を説くもので右に述べた『文句』の文を典拠としないものうち、特に女人成仏について詳しく述べる文を取りあげたい。

法華經と日蓮聖人の女人成仏思想について (和田妙咲)

⑥ 『開目抄』

宝塔品の三箇の敕宣の上^ニ提婆品に二箇の諫曉あり。(中略)龍女が成仏此^レ一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらわす。法華經已前の諸ノ小乘經には女人ノ成仏をゆるさず。諸ノ大乘經には成仏往生をゆるすやうなれども、或^ハ改転の成仏^{ニシテ}、一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙^{コト}一例諸と申^シて龍女^カ成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあげたるなるべし。(中略)今法華經の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏^モ顕^ハれ、達多ノ悪人成仏の時慈父ノ成仏^モ顕^ハるれ。此の經は内典の孝經也。(五八九、五九〇頁)

見宝塔品にて三箇の勅宣が、提婆品では二箇の諫曉が明される。この文では、尔前經における女人成仏・女人往生は実体のないものであり、龍女成仏において初めて真の女人成仏を開いたといえ、法華經にて女人と悪人の成仏が説かれて初めて父母の成仏も可能となるので、法華經は仏教の孝經であると示している。

⑦ 『千日尼御前御返事』

第五ノ卷に即身成仏と申^ス一經第一の肝心あり。(中略)龍女と申せし小蛇を現身に仏になしてましましき。此時こそ一切の男子の仏になる事をば疑^フ者は候はざりしか。されば此經は女人成仏を手本としてとかれたりと申^ス。(一五四一頁)

提婆品に即身成仏という法華經中第一の法門があり、その中で龍女は幼い畜生でありながら現身にして成仏した。その時に全ての男性の成仏への疑いも消失した。法華經は女人成仏を手本として一切の衆生の成仏が説かれた経典なのである。

以上の例は聖人の成仏観において女人成仏がいかに重要視されているか、また女人成仏の典拠は法華經にしかないことがいかに強調されているかを示すものと考えられる。

(二) 龍女成仏をもって即身成仏を説く箇所

ここでは日蓮聖人が龍女成仏を示して法華經の即身成仏を説明している箇所を取り上げる。「即身成仏」という語は妙樂大師『文句記』が初出であるが、中国天台では本格的な議論はなされず、伝教大師が『秀句』の中で始めて龍女成仏をもって「即身成仏」を定義している。

能化ノ龍女、無_レ歴劫ノ行_一、所化ノ衆生、無_レ歴劫ノ行_一。能化所化、俱_ニ無_レ歴劫_一。妙法ノ經力ヲ以テ、即身_ニ成仏_シ、上品ノ利根ハ、一生_ニ成仏_シ、中品ノ利根ハ、二生_ニ成仏_ス。下品ノ利根ハ、三生_ニ成仏_ス。

この文によれば即身成仏には二側面があり、①歴劫修行なく、②生まれのままの姿で、の成仏をさす。ただし即身が時間的にとどの程度の期間を想定するのかについては各々の機根によって三生までを即身成仏と定義している。以下四点を列挙したい。

① 『法華題目抄』

漢土の天台大師御入滅二百余年と申せしに此国に生して伝教大師とならせ給て、秀句と申す書を造り給しに能化所化俱無歴劫妙法經力即身成仏と龍女が成仏を定_メ置_キ給へり。而に当世の女人は即身成仏こそかたからめ、往生極樂は法華を憑_マば疑_ナし。譬_ハば江河の大海に入_ルよりもたやすく、雨の空より落_ルよりもはやくあるべき事也。(四〇四頁)

ここでは先に見た『秀句』の文を引用して、末法の女性の成仏のあり方が即身成仏であることを示している。

② 『木絵二像開眼之事』

即身の二字は色法、成仏の二字は心法。死人の色心を変_シて無始の妙境妙智と成す。是則即身成仏也。故_ニ法華經_ニ云_ク、所謂諸法如是相_ノ身_ノ死人_ノ心_ノ同_ク如是性_ノ心_ノ同_ク如是体_ノ心_ノ等_ニ云_云。又云_ク、深_ク達_シテ罪福ノ相_一偏_ク照_シテマフ_一於十方_一微妙ノ淨_キ

法華經と日蓮聖人の女人成仏思想について (和田妙咲)

法身具セリ相ソト三十二等云云。上二句は生身得忍。下の二句は即身成仏。即身成仏の手本は龍女ナリ。 (七九四頁)

即身成仏の語句のうち即身は色法、成仏は心法を指す。亡き人の色心が無始のさとり境地となることを即身成仏という。そのゆえに方便品には諸法実相が説かれ、提婆品の「深達罪福相偏照於十方」は生身得忍を顕し、「微妙浄法身具相三十二」は即身成仏を示している。すなわち即身成仏の手本は提婆品の龍女であると説いている。

③ 『撰時抄』

五障の龍女は蛇身をあらためずして仏になる。(二〇〇三頁)

④ 『光日尼御返事』

三ツのつなは今生に切れぬ。五ツのさわりはすで(既)にはれぬらむ。心の月くもりなく、身のあかきへはてぬ。即身の仏なり。(二七九五頁)

この文では尔前経に説かれた五障三従説は法華経で破られ、その法華経に説かれる女人成仏は即身成仏であると述べる。

以上四例をみると、文永年間より佐渡期、身延期に至る各時代において聖人が一貫して即身成仏を意識していたことが窺える。伝教大師が『秀句』にて龍女成仏を以て即身成仏を定義しており、聖人はそれを学んで即身成仏を述べる際に龍女成仏を示しているといえる。また②『木絵二像開眼之事』をみると、伝教は即身成仏を女性だけでなく全ての者の成仏のあり方として考えていることが分かる。

(三)「行浅功深」としての説示——『文句記』「釈隨喜功德品」を手がかりに

さて龍女成仏を法華經の力用と説明する『秀句』の文は先にみたところであるが、妙樂大師『文句記』卷一〇の中「釈隨喜功德品」にも同様の説明があり、日蓮聖人がそれを引用するので確認したい。

①『祈祷抄』

而ルに靈山会上にして即身成仏せし龍女は、小乘經には五障の雲厚ク三從のきづな強しと嫌はれ、四十余年の諸大乘經には或は歷劫修行にたへずと捨テられ、或は初發心時便成正覺の言も有名無実なりしかば、女人成仏もゆるさざりしに、設ヒ人間天上の女人なりとも成仏の道には望ミなかりしに、龍畜下賤の身たるに、女人とだに生れ、年さへいまだたけず、わづかに八歳なりき。かたがた思トもよらざりしに、文殊の教化によりて、海中にして法師・提婆の中間、わづかに宝塔品を説カれし時刻に、仏になりたりし事はありがたき事也。一代超過の法華經の御力にあらざればいかでかかくは候ベき。されば妙樂は行浅功深以顯經力とこそ書カせ給へ。龍女は我ガ仏になれる經なれば仏の御諫いさななくとも、いかでか法華經の行者を捨テさせ給ベき。(六七三、六七四頁)

この文では、尔前經では天上界の女人でも成仏が許されなかつたのに対して、龍女が畜生界、女性、八歳であるにも関わらず成仏したことは有難いことであり、それは一代諸經の中で最勝の法華經の力でなければ実現されなかつたという。さらに「釈隨喜功德品」の文を引いて自分がどうして法華經の行者を見捨てることができるかとまとめている。

ここで引用される『文句記』の該当箇所は次のようにある。

即ち、時衆の下、恐らくは人の謬解せん者、初心功德の大なるを測らずして、功の上位に推おもんばかり、この初

法華經と日蓮聖人の女人成仏思想について(和田妙咲)

心を蔑ないがろにせん。故に、今、彼の行浅く功深きを示して、以て経力を顕す。⁴⁹

意識すれば、謬解者は尔前経を信じて初心者の法華信仰の功德が大きいことを信じようとしなが、初発心の下機下根の修行者は行が浅くとも法華経の経力と功德によって成仏できるとある。

龍女成仏はひとえに法華経の経力であるとして、その法華経への信仰の尊さを示している。ちなみに①で聖人が宝塔品が説かれた時には既に龍女が成仏していたとみなすことは興味深い点である。

(四) 女人成仏の「手本」としての説示

日蓮聖人は法華経の龍女成仏により一切の女性の成仏への道が開けたとして、滅後末法にて法華を信仰する女性の「手本」として龍女を挙げ、さらなる法華信仰を勧めている。ここではそれを示す部分を挙げてみる。

① 『法華題目抄』

龍女は我闍大乘教度脱苦衆生とこそ誓しが、全^ケ他経計^リを行じて此経を行ぜじとは誓はず。今の女人は偏に他経を行じて法華経を行ずる方をしらず。とくとく心をひるがへすべし。心をひるがへすべし。(四〇五頁)
ここでは龍女が成仏後に法華経弘通によって苦しみの中にいる衆生を救いたいと誓願を立てたことを引用して、女性を救う経典はただ法華経のみであると、末法の女性に法華経信仰を勧めている。

② 『兄弟抄』

龍女が跡をつぎ、末代悪世の女人の成仏の手本と成給べし。(九三二頁)

③ 『富木尼御前御書』

龍女があとをつぎ、摩訶波舍波提比丘尼のれち(列)につらなるべし。(一一四九頁)

以上、日蓮聖人は女性を救う経典はただ法華経のみであると、末法に生きる女性に龍女を手本として法華

信仰に勤しむように説いていることがわかるだろう。

ここまで本節では日蓮聖人が女人成仏を述べる箇所をその内容に分けて分類した。最も多いのは龍女成仏により十界皆成が開かれたことを示し、一切衆生のなかに女性も含まれるため女人成仏は一切皆成の一部分で捉える記述である。その際「釈授記品」が多用されることは龍女成仏を女人成仏の論拠とする一般的な見解を否定する一つの材料といえるのではないだろうか。また伝教大師は龍女成仏をもとに即身成仏を定義した訳であるが、それは女性だけに限定されたものではなく一切の衆生の成仏の方法である。一切衆生の中にはもちろん女性も含まれるから、女人成仏も変成男子の成仏ではなく即身成仏というわけである。それらをふまえた上で聖人は末法に生まれた下機下根の凡夫であり社会的にも古来蔑視されてきた女性にただ法華経では女性も成仏できるということの一つの実例に龍女を出し、確固とした法華信仰を勧めているのである。

四 おわりに―結論にかえて

本論文では法華経提婆品の文とそれに対する注釈書を手がかりにして日蓮聖人遺文について検討した。その結果、特に法華経提婆品における中心課題である変成男子について日蓮聖人は言及しておらず、聖人が女人成仏の理論的根拠を提婆品の龍女成仏に依存していないことを明らかにした。一般には龍女は変成男子しなければ成仏できないとみなされ、さらにそこから法華経が女性差別の經典であるという意見について、法華経本文や注釈によればその見方は法華経の文意とは大きくかけ離れるものであることを示しえたと思う。

また日蓮聖人の女人成仏思想の根拠は龍女成仏であるという従来の説に再検討を加えるために、遺文中の女人成仏への言及箇所を各視点から考察してみると、聖人は龍女成仏を女人成仏の根拠としたのではなく、法華経の説く一切皆成を根拠とされたのではないかという結論に至った。その一切衆生の成仏の方法が變成男子ではなく即身成仏であるので、聖人は變成男子について一切言及されないのではないだろうか。

註

- (1) 『大正蔵』第九卷三五頁a～c。
- (2) 第一に古代より中世までの寺院は女人結界により女性を拒絶していたこと、第二に下山した鎌倉新仏教の祖師達には女人往生思想・女人成仏思想を生み出し、それを庶民に説いたことが記されている。
- (3) 笠原氏の意見を批判的に検討し、九世紀後半、家父長制度の浸透の中で女人罪業観・女性不浄観が社会に浸透し、仏教にも女性差別思想が生まれ奈良時代からの官尼と官尼寺を消滅させたとまとめている。
- (4) 渡邊①第七章女人成仏論。
- (5) 平川①第三章六「女性の菩薩の在り方」。
- (6) 大越「仏教文化パラダイムを問い直す」(大越他①所収)二八～三〇頁。
- (7) 荻谷①
- (8) 望月①
- (9) 日蓮聖人の女性観や女人成仏観の研究を残しているが、研究が進むにつれて龍女成仏の捉え方が変化しているように感じられる。最も新しい論考である桑名④では、法華経が女人を第一とすると聖人が宣言したのは一切衆生皆成仏道を満足させる教えが法華経にしかないためであり、聖人の女人成仏観の特徴は變成男子しないことであ

る。その中で龍女成仏の用例が多いのは現証面の功德を当時の人々に強調するためとまとめている。

(10) 日蓮聖人の女人成仏思想を「一念三千の成仏」とする見解に基づき諸論文を出している。

(11) 日蓮聖人の女性観・女人成仏観・女人教化等、日蓮教学のうち女性に関わる部分を考察する論考を数多く出している。

(12) 同五一頁「日蓮は（中略）法華経提婆品の龍女成仏⇨女人即身成仏を証拠に女人成仏の法門を語り」とある。同様の表現は同②一〇八頁にもみられる。

(13) 本論文二―(三)―3 変男男子のもつ意味―『文句』と『秀句』の解説に後述。

(14) 塚本①・筒井①等を参照されたい。さらに伊藤①には二八の法華経成立論が示されている。

(15) 厳密にいえば、『女人成仏抄』（『定遺』三三五頁）および『秀句十勝抄』（『定遺』一三三四頁）に『文句』『釈提婆達多品』の文が引用されているが、前者は真蹟がなく内容的にも問題があると思われる、後者は『秀句』の説明に『文句』を使用しているだけで日蓮聖人の私見はみられない。

(16) 『大正蔵』第九卷三五頁a。

(17) 岩波『法華経（中）』二二八頁。

(18) 藤井①六四四頁。

(19) 『伝全』第三卷二六一頁。

(20) 畜生を「不善の報」というのは前世の行為の報いとして六道のうち畜生に生まれてしまったということであるうか。

(21) 「八歳」とは実際に八歳であったの小さな女の子のモデルとして八歳を採用したのかは分かりかねるが、「八歳」というと、小学生低学年の思慮分別が確立されていない、あどけなさの残る少女という印象が強く一方、純粹に教えを求める心のきれいさを持っているように受け取れる。

法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について（和田妙咲）

- (22) 「四智積執ニ別教ニ為疑。五龍女明レ円釈レ疑。六身子挾ニ三藏権ニ難。七龍女以ニ一実ニ除レ疑。」(『大正蔵』三四卷一
一七頁a)
- (23) 『大正蔵』第九卷三五頁b。
- (24) 過去世において何度も生まれ変わり死に変わり、あるときは難行苦行し、あるときは衆生のために自らの命を犠牲にし、人々を救う為に修行をして……というのは、ジャータカ物語の示すところであろうか。
- (25) 『伝全』第三卷二六二頁。
- (26) 『天台四教儀』四四頁参照。
- (27) 『大正蔵』第九卷三五頁c。
- (28) 五障は五礙ごげともいい、女性は梵天王、帝釈・魔王、転輪聖王、仏身の五つになれないとする教えで多くの大乘経典にみられる。
- (29) 『伝全』第三卷二六三頁。
- (30) 『天台四教儀』三四～三六頁参照。
- (31) 岩波『法華経(中)』二二三頁。
- (32) ショバ・ラニ・ダシユ①九五頁。
- (33) 『大正蔵』第九卷三五頁c
- (34) 「第七龍女現成明証復ニ。一者猷レ珠表得レ円解。円珠表ニ其修得レ円因。奉レ仏是將レ因剋果。仏受疾者獲レ果速也。(中略)ニ正示「因円果満」。(『大正蔵』三四卷一一七頁a)
- (35) ここでの「宝珠」が何を指すのかは明確にはわからないが、教えを求める者(龍女)にとつて一番の恩人は教えを授けてくれたもの(仏)であり、龍女はその恩に報いるために自分の持つ一番価値の高い物を仏に捧げたと考えるべきではないか。

- (36) 田上①一二〇頁。
- (37) 龍村①二六頁、龍村②二七頁、龍村③二八頁。
- (38) 植木①二一七～二四三頁。
- (39) 佐野①一七～三二頁。
- (40) 『大正藏』第九卷三五頁c。
- (41) 龍女の成仏を疑う者があまりにも多かつたため釈尊が不可思議な力を用いて皆にその様子を見せたのであろうか。
- (42) 「第八爾時娑婆下。明時衆見聞復二。(中略) 南方縁熟宜下以二八相成道^上。此土縁薄祇以龍女教化。此是権巧之力。得二一身一切身。」(『大正藏』三四卷二七頁a)
- (43) 『伝全』二六四頁。
- (44) 田村①五頁。
- (45) 女性宛の聖人遺文をまとめた代表的なものに鈴木一成『日蓮聖人御遺文講義』第一二卷(女人篇)、岡元鍊城編著『日蓮聖人の御手紙』第三卷(女性篇)等がある。
- また女人成仏への言及がある部分を整理したものは「日蓮聖人遺文に引用される女人成仏関連の記述一覧」(穂坂②所収)及び「別表」日蓮聖人遺文における法華経提婆達多品龍女成仏説に関する説示一覧表」(穂坂④所収)、鈴木①③がある。
- (46) 「他経但記菩薩不_レ記二乗」。但記善不_レ記悪。但記男不_レ記女。但記人天不_レ記畜。今経皆記。」(『大正藏』三四卷九七頁a～b)
- (47) 『伝全』二六五～二六六頁。
- (48) 『大正藏』三四卷一三八頁cの「文句」の文を指す。
- (49) 「時衆下恐人謬解者。不_レ測_二初心功德之大。而推_二功上位蔑_二此初心」。故今示_二彼行浅功深。以_レ顯_二経力」。『大法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について(和田妙咲)

正蔵』三四卷三四四頁c)

(50) 『上野殿後家尼御前御書』(『定遺』一七九三頁)

(51) 『日妙聖人御書』(同六四七頁)

参考文献一覽

(一) 事典・全集・基礎資料類

岩波『法華經(中)』坂本幸男・岩本裕『法華經(中)』(岩波書店、昭和三九年)

『天台四教儀』関口真大『昭和校訂天台四教儀』(山喜房仏書林、平成二五年)

『大正蔵』『大正新修大蔵経』第九卷法華部全・華嚴部上(大正新修大蔵経刊行会、大正一四年)第三四卷経疏部二

(大正新修大蔵経刊行会、昭和四一年)

『天全』多田厚隆・多田孝文『天台大師全集』法華文句五(中山書房仏書林、昭和六〇年)

『伝全』『伝教大師全集』第三卷(天台宗宗典刊行会、明治四五年)

『定遺』『昭和定本 日蓮聖人遺文』全四卷(立正大学日蓮教学研究編纂、身延山久遠寺、平成二二年)

(二) 論文他

石川① 石川教張「日蓮の女人成仏法門について―法華経提婆品の龍女成仏を中心に―」(『大崎学報』第一五五号、

平成一一年三月)

石川② 石川教張「日蓮の法華女人論」(『日蓮教学教団史論叢』、平成一五年三月)

伊藤① 伊藤瑞叡『法華経成立論史―法華経成立の基礎的研究―』(平楽寺書店、平成一九年)

植木① 植木雅俊『仏教のなかの男女観 原始仏教から法華経に至るジェンダー平等の思想』(岩波書店、平成一六年)

植木② 植木雅俊『积尊と日蓮の女性観』(論創社、平成一七年)

植木③ 植木雅俊『梵漢和対照・現代語訳 法華経下』(岩波書店、平成二〇年)

大越他① 大越愛子・源淳子・山下明子『性差別する仏教 フェミニズムからの告発』（法蔵館、平成三年）

岡元① 岡元鍊城『真蹟対照現代語訳 日蓮聖人の御手紙 第三卷女性篇』（東方出版、平成二年）

笠原① 笠原一男『女人往生思想の系譜』（吉川弘文館、昭和五〇年）

片桐① 片桐忠学『日本天台宗に於ける成仏の問題』（『印度学仏教学研究』第三九卷第二号、平成三年三月）

荻谷① 荻谷定彦『法華経における女性』（『日本仏教学会年報』第五六号、平成三年五月）

栗原① 栗原淑江『仏教史における女性の問題―日蓮の女人成仏論を中心に―』（『東洋学術研究』第四一巻第一号、平成一四年六月）

桑名① 桑名貫正『日蓮聖人の女性観』（『仏教と女性』、平成三年一〇月）

桑名② 桑名貫正『日蓮聖人の女人成仏について（一）―法華経の成仏の文証に関して―』（『棲神』第六四号、平成四年三月）

桑名③ 桑名貫正『日蓮聖人の女人成仏について（二）―法華経の成仏の文証に関して―』（『棲神』第六五号、平成五年三月）

桑名④ 桑名貫正『日蓮聖人の女人成仏観』（『身延山大学東洋文化研究所所報』第二号、平成一〇年三月）

佐野① 佐野匡史『女人成仏の論―『法華経』提婆達多品の新解釈―』（『国文学論考』第四六号、都留文科大学国語

国文学会、平成二二年一二月）

シヨバ・ラニ・ダシユ① シヨバ・ラニ・ダシユ『マハーパジャーパティー―最初の比丘尼―』（法蔵館、平成二七年九月）

鈴木① 鈴木隆英『日蓮聖人の女性観（一）』（『論叢 行道』第一号、平成六年九月）

鈴木② 鈴木隆英『日蓮聖人の女性観（二）』（『論叢 行道』第二号、平成八年一二月）

鈴木③ 鈴木隆英『日蓮聖人の女性観（三）』（『論叢 行道』第三号、平成一〇年三月）

法華経と日蓮聖人の女人成仏思想について（和田妙咲）

- 平① 平雅行「中世仏教と女性」(『日本女性生活史』第二卷中世、平成二年)
- 田上① 田上太秀「仏教と性差別―インド原典が語る」(東京書籍、平成四年)
- 龍村① 龍村龍平「變成男子考」(『印度学仏教学研究』第二六卷第二号、昭和五三年三月)
- 龍村② 龍村龍平「続變成男子考」(『印度学仏教学研究』第二七卷第二号、昭和五四年三月)
- 龍村③ 龍村龍平「變成男子説の一側面」(『印度学仏教学研究』第二八卷第一号、昭和五四年一二月)
- 田村(晃)① 田村晃祐「日本天台初期の即身成仏思想」(『東洋学論叢』一三(東洋大学文学部紀要 第四一集、昭和六三年三月))
- 千葉① 千葉照観「伝教大師の即身成仏義」(『天台学報』第二四号、昭和五七年一月)
- 塚本① 塚本啓祥「法華経の文献史的研究」(『法華経の成立と展開』、昭和四五年三月)
- 塚本② 塚本啓祥「法華経の成立と背景―インド文化と大乘仏教」(佼成出版社、昭和六一年)
- 筒井① 筒井奈々「法華経提婆達多品を中心とした成立史について」(『宗教研究』三三五号、平成一五年三月)
- 平川① 平川彰「初期大乘仏教の研究Ⅰ」(春秋社、平成元年)
- 藤井① 藤井教公「現代語訳 妙法蓮華経」(すずさわ書店、平成二二年)
- 穂坂① 穂坂悠子「日蓮聖人の女人観―女人成仏論を中心に―」(『日蓮教学研究所紀要』第三五号、平成二〇年三月)
- 穂坂② 穂坂悠子「日蓮聖人における女人成仏論の一考察」(『日蓮教学研究所紀要』第三六号、平成二一年三月)
- 穂坂③ 穂坂悠子「日蓮聖人の女人教化―『法華題目抄』を中心に―」(『日蓮教学研究所紀要』第三七号、平成二二年三月)
- 穂坂④ 穂坂悠子「日蓮聖人における龍女成仏説の受容をめぐって―法華経提婆達多品の説示に沿って―」(『日蓮教学研究所紀要』第三八号、平成二三年三月)
- 穂坂⑤ 穂坂悠子「日蓮聖人における女人授記説の受容について」(『日蓮教学研究所紀要』第三九号、平成二四年三月)

月)

穂坂⑥ 穂坂悠子「超日明三昧経」の五障・三従説と女人成仏に関する考察―法華経提婆達多品・日蓮聖人遺文の説示を踏まえながら―（『仏教学論集』第二十九号、平成二十四年三月）

間宮① 間宮啓壬「日蓮にみる女性の救済―一念三千の成仏―」（『身延論叢』第一号、平成八年三月）

間宮② 間宮啓壬「日蓮における「龍女成仏」理解の系譜―即身成仏の文脈で―」（『宗教研究』八七巻別冊、平成二六年三月）

間宮③ 間宮啓壬「日蓮にみる女人救済（総括版）」（『法華仏教研究』第二二号、平成二七年五月）

望月① 望月海淑「法華経における女性成仏に就いて」（『身延山大学東洋文化研究所所報』第二号、平成一〇年三月）

渡邊① 渡邊棟雄『法華経を中心にしての大乗経典の研究』（青山書院、昭和三二年）

〈キーワード〉 女人成仏 提婆達多品 龍女

〔付記〕

本論文は興隆学林専門学校に提出した平成三〇年度卒業論文を加筆修正したものです。卒業論文ならびに本論文作成時には、主査の石田智宏先生、副査の株橋隆真先生よりご指導いただき、また山野俊郎先生には法華経や『法華文句』『法華秀句』などの漢文読解について個別にご指導をたまわり、原文と向き合うことの大切さを教えていただきました。ここに記して謝意を表します。